

研究ノート

大衆観光の社会事業的役割

——大衆観光成立史のための素描——

布 引 敏 雄

は じ め に

私は数年前から谷美由紀前関西医療大学教授（英文学）と共同研究を行っていた。そのテーマは、19世紀から20世紀初頭にかけての孤児を主人公にした物語が、民主主義の原理を読む者に平易に教導するものであったことを論証しようとするものであった。

当時は、産業革命がおこり資本主義が成長しつづける社会——まだ恐慌という資本主義の破綻を経験していない時代にあつて、その社会の原理である民主主義（当然ながらそれは自由主義・個人主義理念の上に立脚する）は至上のものとして人びとに牧歌的に支持されていた。

私は、孤児物語研究に参加するうちその副産物として、それら孤児物語の中に公園の発達を物語る部分が存在することに気づいた。しかも、そこで語られる公園は孤児物語と同様に民主主義原理を説明する舞台装置でもあった。実に公園は民主主義社会の一象徴でもあったのである。

本稿では孤児物語を中心に据えはするが、それ以外にも目についた文芸作品をいくつか取り上げ、公園や「旅」がどのように登場しているかを検討してみることにする。

なお、本稿における大衆とは、民衆とか人民といった用語が階級対立や身分格差を意識した用語であるに対して、それらを意識しない用語である。したがって、大衆観光とは富裕者や特権的支配層の専有物であった観光旅行が、生産諸力の向上にともない、従来の観光旅行専有者を越えて多くの人びと（これを大衆とよぶ）にも享受されるようになった段階での観光旅行をさす用語として用いる。

大衆観光の始発期は先進欧米諸国にあつては産業革命が一段落した19世紀であり、日本にあつては20世紀初頭（いわゆる大正時代）である。いうまでもなく今日の日本社会にあつては、観光旅行の主流は大衆観光であるといっても過言ではない状況にある。

1 私園から公園へ

自然の治癒力——『秘密の花園』

バーネットの『秘密の花園』は1909年に書かれた。

主人公のメアリは、インド育ちだったが疫病で両親を一度に亡くして孤児となり、イングランドのヨークシャーにある屋敷に移る。その屋敷はヘザーの生い茂る荒野の近くにあった。その屋敷の主人は背骨が曲がる病気にかかっており、最愛の妻を10年前に亡くしていた。メアリは小柄で痩せていて顔色も悪く、意地悪で傲慢な少女であった。そんな彼女も、荒野の新鮮な空気を吸ううちに次第に健康になっていく。

この『秘密の花園』のテーマの一つは、自然の治癒力——自然に触れる生活をおくることによって不健康な人間の精神や肉体が治癒されていく——についてである。

物語では、屋敷内で隔離されたかのように生活していたコリン少年——父と同じ病のためコリンは精神的にも肉体的にも病的な状況に陥っている——も、屋敷に付属する庭園にふれることによって健康を回復する。

自然の治癒力については、英文学ではないがやはり孤児をあつかった物語として有名なスピリの『ハイジ』（1881刊）も同様である。ハイジの友だちでフランクフルトに住むクララは、アルプスへ旅行し、そこに滞在することによって健康を回復する。コリンもクララも、両方とも立って歩くことができなかつた状態から、立って歩くまでに回復する。クララの侍医の言葉が、それを象徴する。

「山の上はいいなあ、からだも心も健康になって、生きていることがまたたのしくなってくるからなあ。」（矢川澄子訳・福音館書店・1974刊）

『秘密の花園』の第二のテーマは、庭園の開放である。この物語では、屋敷の主人は妻の思い出の詰まった庭園に鍵をかけて閉ざし、誰も出入り出来ないようにしている。メアリはその鍵を偶然に見出し、その庭園に出入りするようになる。やがて、下女の弟ディコンや園丁のベン——彼等は屋敷の主人とは異なり労働者・農民などの働く階級である——を集め、共に庭園の手入れをする。屋敷の主人（明確に書かれていないが貴族であろう）の私園 Private Garden であつたものが、やがて公園 Public Garden へと変質していくことを暗示して物語は終わる。

そのことは下女マーサの母が、オレンジの所有について物語る部分に象徴的に示されている。少し長い以下に引用する。

おら、こんなことを話してやっただ。つまり、自分が学校へ行ってたころ、地理で、この世界はオレンジみたいなかっこうをしているものだとおそわったが、まだ十歳とおにならないうちに、おらには、そのオレンジ全体がだれのものともきまってねえことがわかっただ。だれも自分の分け前以上のものは持っていねえし、そうして時にはその自分の分け前がひとまわりするほども広くねえように思われることがあるだ。だが、おめえたちのうちのだれも、このオレンジ全体が自分のものだと思ったりしちゃならねえだ。さもねえと、そのうちおめえたちは自分のまちがatterることがわかるんだが、そいつはひどく苦勞せにゃわからねえだろう、ってね。子供が子供からおそわることというのは、そのオレンジ全体を——皮ごと全部を——うばい合ひしてみたところたねで全くつまらねえってことなんだ。そんなことをしても、おそらく種子たねせえ手に入るかどうかわかりゃしねえし、種子たねなんか苦くってとても食べられねえんだからね。(龍口直太郎訳・新潮文庫・1954刊)

ここでの「オレンジ」とは、富の配分もしくは地球の分割(即ち、植民地の争奪)の寓意であり、作者のそれへの批判的視線を示すものである。産業革命を終えた先進資本主義国が世界各地の「後進」地域を奪い合い、現地住民を悲惨な状況に陥らせ、搾取し続けていること、他方、自国内での有産者と無産者の深刻な対立をバーネットは告発している。

そうした社会において、もはや貴族の庭園は労働者・農民たちのために開放されるべきだというのがバーネットの本旨であろう。

公園の成立——『パレアナの青春』

アメリカの作家エレナ・ポーターの『少女パレアナ』(1913刊)とその続編『パレアナの青春』も孤児を主人公にした物語である。アメリカ的樂觀主義というのか、どんなによくないことが起きて、その中に何かよいこと(幸せ・喜び)を見つける遊びをするパレアナ(ポリアンナと訳されることもある)は、『パレアナの青春』では少し成長してボストンの街に暮らすようになる。

知らない街での生活で、さびしさや退屈をまぎらわせるためにパレアナは散歩に出かける。そこで彼女は公園に迷い込む。パレアナはそれが「公園」だということを知らず、だれか金持ちの人の庭園だろうと思う。彼女は勇気を出してそこにいた人たちに話しかける。

「あのう——これは園遊会でございますか？」

女の人はびっくりして、

「園-遊-会？」とおうむ返しに聞きかえしました。

「ハイ。あのう、あたくしも——ここにいて、いいんでしょうか？」

「いてもいいかって？ いいにきまつてるじゃありませんか。だれだって来ていいんですよ」

(中略——パレアナは公園を園遊会だと誤解する。それに対して男性が答える)

「なるほど、お嬢さんの言うとおりに、園遊会にちがいないなあ。園遊会をやってる『ご主人』っていうのはね、ボストン市ですよ。これは公園です——公園っていうのは、みんなのためのものなのです。知ってらっしゃるでしょう？」(村岡花子訳・角川文庫・1962刊)

公園 *public garden* というものは誰にでも開放されているものなのだ。園遊会のように貴族や富裕者が自邸の庭 *private garden* を開放して、交遊範囲内で人びとを招くのととは根本的に異なっている。

20世紀初頭のアメリカのボストン市では公園が設営されていた。パレアナの物語でわざわざ「公園」の説明をしているのは、当時、まだ公園は珍しいものだったからだ。

園遊会といえば、マンスフィールドの短編小説『園遊会』(1922刊)も日本ではよく知られている。この小説は児童向けのものではないが、主人公は少女である(ただし孤児ではない)。舞台はニュージーランドらしいが、その場所を英国だとしても鑑賞や評価に変わりはないだろう。

主人公の少女ローラは母親から、子供たちだけで園遊会をやってみなさいと委ねられる。ローラは園遊会を準備する過程で庭師、花屋、料理人などの労働者と接し、彼等の健全さと自分の属する階級の尊大さを実感する。そんなとき、家の門前で馬車屋が事故で死ぬ。馬車屋たち労働者は彼女の家の近くに小さく固まって暮らしている。ローラは労働者の死を悼み園遊会を中止しようとするが、一労働者の死に何の関心を示さない母や客たちに反対されて園遊会は続行される。園遊会がすんだのち、ローラは花籠をもって馬車屋を弔問に訪れる。(『幸福・園遊会』崎山正毅・伊沢龍雄訳・岩波文庫・1969刊)

以上がおおよそのあらすじだが、ここでは園遊会に招き招かれる階級と招かれない労働者階級の違いを不合理なものとして描いている。ローラ(上流階級)の馬車屋(労働者階級)弔問は園遊会なるものの終焉を予告するもので、『秘密の花園』や『パレアナの青春』で描かれた、私園から公園への流れと軌を一にするものである。

2 大衆の登場と観光旅行

20 世紀はじめの文芸から

川端康成の『伊豆の踊子』は 1926 年（大正 15）の作品だが、川端が伊豆旅行をしたのは彼が 19 歳のときだから、すなわち 1918 年（大正 7）前後の伊豆の情景が描かれているとみてよいだろう。

この物語には 2 種の旅が描かれる。その第一は旧制高等学校学生という特権階級子弟の旅と、もう一つは旅芸人という社会底辺の人びとの漂泊の旅である。20 世紀初頭の日本では、観光旅行に類する旅が可能なのは特権的エリート層のみであり、一般勤労階級の人びとにとっては観光旅行など不可能だった。川端は特権階級の端に位置する人間であり、もう一つの名作と評判の高い『雪国』（1937）においても、その主人公の島村は高等遊民と呼ぶしかないような特権階級の人物である。

島村のような人物が温泉宿に泊まりその地の芸者と遊ぶ物語が、なぜに“名作”とされるのか不思議でならないが、ここでも底辺勤労階級の女性（芸者）駒子と高等遊民の対立が物語の軸をなしている。

観光地としての温泉地が一部金持ちや特権階級者たちのみに向けたものであることに、社会が疑問を提示しはじめている。そのことを川端の二作品は教えている。これは川端の意図せざることではあろうけれども。

観光旅行を、多くの大衆（労働者・農民）の享受できる娯楽・慰安へと変貌させていかねばならない。労働者階級が広汎に成立した 20 世紀初頭の日本社会が、それを要求しているのである。

大衆芸能としての流行歌は昭和初期にラジオやレコードの普及によって爆発的に広まったが、たとえば高峰三枝子の歌った『湖畔の宿』（佐藤惣之助作詞・服部良一作曲）では、人生に疲れた女がひとり、湖畔の宿に泊まり、癒されていく。この歌の二番と三番の合間に語られるセリフは、こうである。

ああ、あの山の姿も、湖水の水も、静かに静かに黄昏れて行く。この静けさ、この寂しさを抱きしめて、わたしはひとり旅に行く。誰も恨まず、みんな昨日の夢とあきらめて、幼児のような清らかなころを持ちたい。そして、そして、静かにこの美しい自然を眺めていると、只ほろほろと涙がこぼれてくる。

彼女は湖畔の宿に泊まることで再生を果たしている。活力の甦りが暗示されている。女性の一人旅は珍しい時代だから、この歌の主人公は、新しく芽生えたホワイトカラー層の女性であろうか。しかし、大衆たちは近い将来に実現可能な希望としてこの旅をとらえた。それがこの歌のヒットした理由であろう。

林伊佐緒の歌った『高原の宿』（高橋掬太郎作詞・林伊佐緒作曲・「ああ高原の宿に来て 一人しみじみ 君呼ぶころ」）や近江俊郎の歌った『山小舎の灯』（米山正夫作詞・作曲・「思い出の窓に凭り君を偲べば 風は過ぎし日の歌をば囁くよ」）は、同工異曲のものである。

戦後昭和 20 年代、大ヒットした『君の名は』（はじめ NHK ラジオドラマ、映画化、その主題歌もヒットする）は、あたかも観光案内であるかのように、東京を中心に、佐渡、志摩、北海道、雲仙、とドラマは展開する。戦後高度成長以前の時期にあって、大衆を大いに“観光旅行”にいざなうものであった。

社会事業的視点の存在——『家なき娘』

フランスのエクトル・マローの『家なき子』（1878）では、旅芸人の主人公レミが漂泊の旅を続けるが、それは徒歩旅行であった。同じくマローの『家なき娘』（1890）においても主人公ペリーヌの旅は徒歩であった。“鉄道の世紀”とも云われる 19 世紀末にあっても、なおまだ鉄道の普及は十分ではなかったから、貧しい民衆の“旅”はもっぱら徒歩であったし、観光旅行なるものは有産階級の専有物でしかなかった。

『家なき娘』は児童文学であるが、その結末は現代の者からみると意外ともいえるものである。この物語の主人公ペリーヌは父母の死後、父方祖父の経営する工場へ身元を隠して勤め、母が英国人だったことで英語が堪能であるという能力を生かし、また、持ち前の賢さ、優しさ、勇気などを働かせて活躍し、最後には祖父と孫の対面を果たす。そして物語の締め括りとして、ペリーヌは工場改革を行なうのである。女工たちの宿泊所の劣悪環境を改善し、工場に保育園を常設する。続いて従業員住宅の建設、厚生施設の充実、等々の社会事業的改革であった。

マローの『家なき子』『家なき娘』の 2 作は、徒歩旅行という自然を友とする“旅”を詩情豊かに語り、物語全編を通じて児童の健全な成長を読む者の心に浸透させていく。その結末として社会事業が語られる意味は深い。

産業革命以後顕著になってきた資本家による労働者搾取、その引き起こす労働者の劣悪状況、その結果として犯罪の増加による社会不安、社会主義革命への恐怖。こうした状況への対応として 19 世紀末から 20 世紀初頭にかけて労働者保護の必要が広く認識されるようになり、社会事業と通称される労働者保護の充実がはかられ、国家的にも社会政策として実施されるよ

うになる。『家なき娘』の結末はこうした社会状況を写した鏡であるかのようだ。

3 公園・観光の社会事業的役割

19世紀から20世紀初頭にかけての資本主義の発達が、多くの貧困労働者階級を発生させ、彼らの置かれた窮状が新しい社会問題となった。この課題を克服するために為政者や資本家は社会的政策——その具体的な事業は社会事業と通称された——を実施に移さざるをえなくなった。

日本においては1918年(大正7)の米騒動後に社会政策が開始されたが、揺籃期のそれは理念もまだ固まっておらず、そのせいで対象が漠然と広範囲でありながらも予算規模は小さいという矛盾を抱えての出発であった。したがって、揺籃期の社会事業はあれもこれもと気持ちは逸るが、実際には、出来るところからの一步一步を着実に歩むしかなかった。

揺籃期社会事業の代表的なものは、方面委員(のちの民生委員)の設置、労働者保護を目的とした託児所設置、職業紹介、公営住宅の設置、庶民金融としての公益質屋、等々が主なものである。

少年と自然とのふれあい

前節でみたように19世紀末から20世紀にかけての時期には、自然とのふれあいが人間の健康にきわめて有益であるとの知識がひろく普及したから、社会事業部面において少年の育成にこれを応用する取り組みが各地で盛んとなった。

病弱な児童のために、海浜や林間で避暑を兼ねて宿泊させ、水泳や山歩きの体験学習をさせる海浜学校や林間学校が開かれるようになった。また、自然とふれあう徒歩旅行も試みられるようになった。いわゆる遠足は楽しい学校行事として定着したし、ドイツに始まるワンダーフォーゲル運動も日本に強い影響を及ぼした。

徒歩旅行を背景に生れた宿泊施設であるユースホステルは、日本では第二次世界大戦以後に成立してくるが、その下地の成立は社会事業の揺籃期と重なる。

都市小公園の整備

日本では労働者は主に都市に集住しその生活環境は劣悪であったので、彼等の健康維持と慰安を兼ねて都市に小公園を整備することが揺籃期社会事業の課題となった。それは軽い運動やスポーツを行なう場所でもあり、緑のある空間として疲労した労働者の休憩場所でもあった。また、少年たちの遊び場となったことは言うまでもない。現在、日本の都市公園の特徴は小公

園が多数設置されていることにあるが、これらは社会事業揺籃期の小公園設置の取り組みに端を発している。

都市の小公園は観光という視点からは捉えられないものであったが、やがて労働者をはじめとする大衆の旅行の目的地整備としての自然公園が構想されることとなる。

富豪庭園の大衆への開放

労働者保護の一環として労働者に慰安や娯楽を与えることが必要と考えられ、それらは治安上の好影響が結果として期待されていた。即ち、労働者に慰安や娯楽を具体的に提供することも社会事業の重要な役割と考えられていた。その一端に公園問題がある。

『日本社会事業年鑑』大正11年版では、「民衆娯楽問題」という章節を新たに設け、演劇・活動写真等の興行、展覧会・博覧会、運動競技などと並んで、「公園及び動植物園」にページを割いている。

そこに一例として大阪市の天王寺動物園の場合が提示されている。天王寺動物園では入園料を払っての一日の入園者数がおよそ1万人内外であり、もし入園料を全廃すれば入園者はより一層増加するとして、「社会教育と民衆娯楽を経緯とした公開の動物園を大都市に設立する事は最も重大なる問題の一つ」と指摘している。同時期に大阪市は公園の必要性を認めて大阪市参事会において公園新設と拡張案を可決した。淀川公園の新設と中之島公園の拡張である。こうした公園設立の動きは全国的に始まっていた。

また、同年鑑は、1922年（大正11）に特徴的なこととして、「日本の代表的富豪とも云ふべき人々が其の邸宅又は庭園を一般に開放した事件が多かった事」を指摘している。その事例として、東京の岩崎家・安田家・徳富家の邸宅開放、大阪市では住友家が茶臼山邸を開放、岡山県では大原家の邸園開放を挙げている。大阪市の住友家の場合は茶臼山本邸17520坪全部を大阪市に寄付、市ではこれを公園として用いるとともに一部に美術館を建設することに決定した。

こうした邸園の開放は、前節にみた『秘密の花園』の事例のように、いわば世界的な潮流となっていたものである。

国立公園と大衆観光

同年鑑はさらに続けて以下のように極めて注目すべきことを書いている。

本年度に於て公園問題に関して猶ほ新らしい試みの一として記憶して置くべき事は国立公園調査である。内務省の衛生局で田村林学博士に依託して二月より夏期にかけて日本全

国の枢要なる候補地の調査を行ったのである。其候補地は富士の裾野、瀬戸内海、日本アルプス、阿蘇山、耶馬溪、箱根、日光、十和田湖等であつた。該調査の結果は九月二十日より二十五日まで六回に亘つて大阪朝日新聞に同博士の「国立公園論」として掲載せられた。その大要は「国立公園は大体に於て大自然を舞台として、その部分的加工であり、美化であり、民衆化であつて、海と山とを比較すれば海が多く望まれるに拘はず、山を採用の方が適当であり、且つ山には変化を多からしめる事を条件とし、猶ほ宿泊交通等の設備を完備し数個の国立公園を建設する時に之等の間に組織を立てねばならない。かゝる意味に於て十和田湖、日本アルプス、富士の裾野、阿蘇山等は諸種の条件を比較的よく備へたものである」と云ふにあつた。

民衆娯楽もしくは労働者慰安のための公園の設置は、「国立公園」という構想を生む発端となっていることをここから読み取るべきであろう。

大自然に抱かれての一時は、心身ともに疲れた労働者のための絶好の慰安となろうことは疑いない。新聞に掲載の田村博士の論中に、大自然の「民衆化」という言葉があることを見落としてはならない。国立公園は自然保護の観点からその存立意義が語られることが多いが、始発期にあつては“Public”即ち“大衆化”の意味あいがいざいぶんと濃いものであつた。

国立公園は、当初から「宿泊交通等の設備を完備」することが計画せられていたから、労働者の慰安旅行の目的地となり、将来的には労働者に狭く範囲を限定せず、国民一般（すなわち大衆）がひろく行なう慰安旅行・観光旅行の目的地となることが想定されていたのである。

こうした郊外公園の設置や開発は、地方においても 20 世紀はじめには行なわれはじめていた。大阪市は金剛山公園・赤坂公園・富田林公園・枚岡公園などを計画している。私は『山口県史』の執筆に関わり、現在、山口県の郷土新聞である『防長新聞』をめくっているが、大正時代後期には長門峡や秋芳洞を代表とする県下各地の観光開発に関する記事が頻出することに気づいている。

大衆観光の成立へ

大衆観光が成立するためには、まず大衆に時間的余裕があること、第二に、金銭的余裕があること、第三に交通施設や宿泊施設が整い、それらが廉価であつて大衆が利用できるものであること、この三条件が整う必要がある。

これら三条件が整うのは、第二次世界大戦後に経済復興を遂げる途上に整いはじめ、高度成長経済の成立とともに確立したとみてよい。国民宿舎・国民休暇村といった施設が整ったことは重要な判断基準となる。さらにはエネルギー革命や高速道路整備によって自動車旅行が普及

したことも同断である。

はじめ社会事業的視点から公園や観光を捉えていたものが、時の経過とともに社会事業の範囲が明確化すると、公園や観光は社会事業の範疇から外されていく。戦前の1935年（昭和10）ころには、もはや社会事業の対象ではなくなっている。前節にのべた「湖畔の宿」が流行したのは、1940年（昭和15）のことであり、この歌には社会事業的色彩は全くない。

いわゆる修学旅行は大衆観光の基盤形成に寄与したが、とりわけ第二次世界大戦前後に盛んとなり定着する。

しかし、現在盛んに行なわれている大衆観光の中には、揺籃期社会事業のめざした労働者慰安の目的が継続されていることを確認しておきたい。

お わ り に

本稿においてのべようとしたことの概要は以下である。

- (1) 産業革命が一段落した社会にあつて、旧来の社会上層が私園を開放する動きがみられ、これとほぼ同時進行で社会事業的役割を果たすものとして公園の整備が計られる。
- (2) 労働者保護の一環としての公園の整備は、慰安・娯楽のいっそうの拡充策として旅行の普及へと連なる。社会事業揺籃期に着想された国立公園は自然公園としての性格を保持しつつも、大衆観光における観光目的地としての役割を果たすことになる。
- (3) 社会事業が発展・進化するにつれて、公園や観光旅行の社会事業的役割が忘却されることとなったが、その役割は現在に至ってもなお継続されている。

(2009. 10. 31)